

# 頭を打ち碎かれる天狗

— 眞言僧榮海における天狗像を中心に —

佐藤愛弓\*

---

## 目次

---

- はじめに
  - 1. 『眞言伝』に登場する天狗
  - 2. 聖教に登場する天狗
  - 3. 頭を碎かれる天狗
  - おわりに
- 

## はじめに

天狗は中世説話のさまざまな場面に登場する怪異のひとつである。中世の天狗は、鳥のような嘴があり、両肩から翼が生えているという姿であらわされ、高い鼻を持ち高下駄を履いた近世以降の天狗とは異なる。また鵠の姿で登場することもあり、術を見破られると糞鳶の姿をあらわすこともある。『今昔物語集』巻二十には多くの天狗説話が載せられているが、反仏法の存在として撃退されることが多い。また愛欲に執した僧侶や、驕慢心を持った僧侶が天狗道に墮ちるとされている。鎌倉末期の繪巻『天狗草紙』では、各宗派の僧たちが驕慢心を持ってしまったために天狗になったとして、僧衣のまま顔には嘴が、背中には翼が生えた天狗の姿で描かれている。

また天狗が注目されるのは、このような性質から、さらに発展して、鬼や怨霊と重なってゆく点である。この点について小峯和明氏は以下のように述べている<sup>1)</sup>。

問題はさらに、反仏法の天狗が政争の敗北者である怨霊と結びつくところにある。その代表が保元の亂で讃岐に流され、戻れずに亡くなる崇徳院。『保元物語』では生きながら天狗の姿となったといい、慈円の『愚管抄』にもみえるから、早くから伝承されていたらしい。怨霊＝天狗が亂世をあやつり演出する、獨特の歴史観がここに生まれる。

このように反仏法の存在である天狗は、仏法王法相依の思想のなかで、反王法の性質をも帯びてゆくと考えられている。そして天狗の担う役割は、次第に大きく発展してゆくことになる。しかし本稿では、そのような天狗の発展ではなく、むしろ天狗の原点であると考えられる天狗と仏教との接点や、僧侶がどのような存在として天狗を捉えていたのかという問題について考えてゆきたい。天狗につ

---

\* 同志社女子大學 非常勤講師 日本古典文學

1) 小峯和明(1991)『説話の森』大修館書店 pp.36~40

いて考える時、まず重要であると思われるのが、天狗という存在と寺院社会との強い結びつきである。

無動寺を建立した高僧、相應の伝記、『天台南山無動寺建立和尚伝』には、染殿後に心を奪われ天狗となった眞濟が、后に取り憑き、相應に調伏されたとする説話が載せられている。この説話で天狗となったとされる眞濟は、弘法大師の弟子でもある高僧である。それを調伏した相應も藤原良相の信頼を得た高僧である。しかもこの説話では、相應は不動尊の助けによって眞濟を捕縛しており、この説話自体が不動尊の力を強調する文脈と強く結びついている。

浄藏の伝記である『大法師浄藏伝』にも、眞濟の化身とされる鵲があらわれる。この伝で眞濟は玄昭に護摩壇で焼かれて撃退される。しかし一度は復活し玄昭に取り憑く、そこをさらに浄藏に調伏されたと記されている。この場合も、取り憑く側の眞濟も、取り憑かれた玄昭も、調伏する浄藏も著名な僧侶である。さらに天狗を護摩壇で焼くという記述からは、天狗と密教の行法との関係の深さを窺うことができる。

また『今昔物語集』巻第二十、第五話では、仁和寺円堂において成典が尼天狗に遭遇するという説話が載せられているが、その天狗は僧侶の衣である三衣の箱を奪おうとしたと記されている。三衣の箱を奪おうと狙うところに、仏法を妨げようとする天狗の性質をみることができよう。

天狗は寺院周辺にあらわれ、僧をつけ狙い、僧に取り憑き、調伏される存在としてあらわれている。繪巻『天狗草子』の出現を待つまでもなく、天狗をめぐる多くの説話は、まず寺院社会周辺を基盤として流布したと考えられる。

しかし天狗と寺院、経典、聖教との関係には不明な点が多い。無住の『沙石集』には、「天狗と云事は、日本に申伝付たり。聖教に慥なる支証なし。先徳の釋に魔鬼と云へるそ是にやと覺へ侍る」とある。また同じく無住の『聖財集』巻中には、「日本に天狗と云ふ事経論の中に見及はす云々」とある。これらにおいては天狗という存在が、経典や聖教にはでてこない、日本固有のものであり、正式な仏教とは結びつかないものであるとしている。

しかしまったく仏教と結びつかないものであるならば、なぜ寺院社会周辺の記事に天狗があらわれるのかという点が問題となる。中世の僧侶は少なくとも天狗という存在を認識し、自らの宗教的な世界観の中に位置づけていたはずである。中世の僧侶からみた天狗とはどのような存在であったのだろうか。天狗は本当に経論、聖教に全く結びつけられないものだったのであろうか。本稿では中世の眞言僧榮海の著作を中心にこの点について考えてゆきたい。

慈尊院榮海は東寺の一長者ともなった勸修寺流の眞言僧であり、多くの著作をなした學侶である。東寺觀智院に伝わる南北朝時代の『野澤血脈譜』によれば、後醍醐天皇や聖無動院道我の師となっている<sup>2)</sup>。また同じく東寺觀智院に伝わる『守護経護摩次第』の建武二年(1335)の識語からは、後醍醐天皇の勅宣によって、護摩を行じたことが判明する。このような榮海の事績からは、彼の王権を守護する密教僧として姿が窺える。しかし一方では觀智院をひらいた杲宝や賢宝の師となっており、南北朝時代以降の東寺の形成にもかかわっている<sup>3)</sup>。このような榮海の活動からは、榮海がまさに鎌倉末期から南北朝時代にかけてという時代の過渡的な役割を担ったことが窺われる。また榮海の残した膨大な聖教は、現在でも事相方面のスタンダードとされており後世への影響は大きい。さらに榮海は、漢字

2) 『野澤血脈譜』(『創建1200年記念東寺國宝展』京部国立博物館、眞言宗總本山東寺編集、朝日新聞社発行、1995年)p.156

3) 『守護経護摩次第』東寺觀智院金剛藏(第264函、第26號)(『東寺觀智院金剛藏聖教目錄』十六卷京都府教育委員會)p.277

仮名交じりで記された伝記集『眞言伝』や、繪卷『釋門三十六人歌仙繪』の製作を行い、勅撰集に三首入集する歌人でもあった。まさにこの時代の密教僧の文化をみる上で重要な僧侶であると考えられる。また彼の著作の一つである『眞言伝』は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と多くの説話を共有している。そのような學侶からみる天狗は一体どのような存在であったのだろうか。まず榮海が編纂した伝記集『眞言伝』について、みてゆきたい。

## 1. 『眞言伝』に登場する天狗

『眞言伝』には次のような天狗の説話や、天狗と同一のものとされていた「魔」に関する説話が載せられている。

〔三修伝梗概〕 (巻七)

伊吹山に三修禪師という人がいた。三十余年の間、苦修練行し山を出ることがなかった。貞觀六年、三善清行の兄、清郷が、賢応という僧とともに山に登り、この三修禪師に會った。ところが賢応は清郷に「あの三修禪師は、長年修行を積んでいるが、學問がない。だからきっと邪魔に欺かれてしまうだろう」と語った。貞觀十八年の春、三修禪師は弥勒菩薩の迎えに會い、玉の輿ののって空へ昇っていった。ところが八日後、山で薪をとることを生業としている人が、「一人の僧が高い松の梢に縛りつけられている」と伝える。弟子たちが怪しんで見に行くと、それは三修禪師であった。先に見た弥勒の迎接の行列は、天狗が欺いて見せた幻影だった。

〔本文 (部分) 〕 (便宜上本文中の片仮名は同一の大ききで表した。以下もこれにならう)

貞觀十八年春、俄ニ天人音樂ヲナシ、玉ノ輿ヲ捧ケテ都率天ノ慈氏ノ迎ト称シテ來ル、禪師則輿ニ乗シテ空ヲシノキテ去ヌ、其日ヨリ八ケ日ヲ経テ、薪ヲ取ル人來テ告テ云、山ノ北ニ高キ松アリ、其ノ木ノ末ニ人ノ叫フ音アリ、是ヲ望ムニ一人ノ僧アリテ、付ラルト云、遺弟等アヤシミテ樹下ニ至テ見ルニ禪師也、悲ミヲ感シテ鷹ノ子ヲ取ル物ヲ腰ニ付テ木スエニ登テ禪師ヲ取り下シヌ、夫ヨリ後禪師驗德ヲ失テ靈驗ナシ、彼ノ天人ト云ハ是天狗也

この場合の天狗は、僧を欺き幻影をみせる存在としてあらわれている。

この説話は『宇治拾遺物語』一六九話、『今昔物語集』巻第二十、第十二話とも共通する有名なものであり、佚書『善家秘記』周辺の話であろうということが今野達氏によって考察されている<sup>4)</sup>。

しかし、『眞言伝』では獨自に「私云」として以下の文が加えられている。

私云、魔障誠ニ恐ルヘシ、無智ナラム人ハ殊ニ不動、大威徳等ノ降魔ノ呪ヲ持誦シテ怠タルヘカラス、智解若シス、メル人ナラハ、空觀ニ入ヘシ、是レ魔障ヲ除ク第一ノ觀門也、(中略) 彼ノ大日經ノ我昔坐道場降伏於四魔ノ文疏家ノ釋意甚深也、又兩部教令不動、降三世等、大自在天降伏ノ事、十八會指歸底哩三昧耶經等ニ、委ク説カ如トシ

魔障を避けるためには、眞言における降魔の行法が有効であり、不動眞言、大威徳眞言の降魔の呪が効果的であるので、これをよく持誦するべきであるという主張である。ここには編者榮海の眞言僧

4) 今野達(1958)「善家秘記と眞言伝所引散逸物語—今昔物語集との關連において—」『國語と國文學』pp.14 ~31

としての立場が強く反映しているとみられる。魔をさけるためどうしたらよいかという実践的な視点から、眞言の効力によって魔がさけられることを強調している。ここに見られる『眞言伝』の姿勢には、これまでの説話文學研究において定着している天狗にユーモアを見るような姿勢は感じられない。天狗説話の滑稽な側面を楽しむような余裕は感じられず、まさに魔に對してどうするのかという現実的な問題にむかっていると見える。

[遍照伝梗概] (卷四)

ある時、天狗が人に憑いて語った。貞觀のころ自分は、当代の有驗の僧を知りたいと思い、鳶の姿になって右大臣の家に入り込み、右大臣を足で踏みつけた。するとたちまち右大臣は病氣になって、人々は大騒ぎとなった。家司は「はやく華山僧正遍照をお呼びするべきだ」といって遍照に請書を遣わした。すると末の時に領狀が返ってきたが、その領狀に、みずらをゆった童子が二人、白杖を持って付き添っていた。自分はそれがとても恐ろしかった。しばらくして、護摩壇をつくるための承仕がやってきて、護法五、六人が來た。夜になって遍照本人がやってきた。護法は數十人に及んだ。修法がはじまって自分は意のままに動けなくなり、ついに鐵の網に入れられて護摩壇の火に投げ込まれ焼かれてしまった。自分は灰になったが、その灰は厠の側に置かれたので、蘇生することができた。その後三十年間、遍照をつけ狙ったが、遍照には一切隙がなく、つけいることができなかった。そこで臨終の時に往生の妨げをなそうとするが、臨終の時も護法童子が護り、迎接の行列に護られ、まったく隙がなかった。遍照は往生を遂げた。

[本文(部分)]

家司云、ナヲ花山ノ僧正ヲ請セラルヘキ也ト、即時ニ請書ヲ遣ハス、末ノ時ニ領狀カツカツヒンスラ結ヒタル童子二人白杖ヲ捧テ狀ニ隨テ相ソヘリ、我頗ル是ヲ恐ル、暫クシテ壇場ヲ墜ランカ爲メニ承仕以下到來ス、又護法五六人來レリ、夜ニ入テ僧正來ラル、護法ノ數十人ニ及フ、吾漸足ヲ收メテ意ニ任スル事アタハス、アヒ忍テ居タリ、(中略)第二日ノ曉ニ鐵ノ網ニ我ヲ入テ、爐壇ノ火ノ中ニ置テ此ヲ燒テ、灰燼ト成シヌ、壇ノ灰ヲ厠ノ辺ニ捨テ置クニ、食氣ツキテ蘇生シテ此ノ處ニイル

この話は『續本朝往生伝』にもみられる有名な説話である。冒頭に述べた『大法師淨藏伝』に現れた鵠の説話と同じく、天狗が密教の修法の護摩壇で焼かれている点が注目される。さらに天狗が僧を護持している護法童子を非常に恐れているということも興味深い。また先ほどの三修の話は臨終の時に天狗に騙されたという話であったが、やはり臨終の時が、一番隙ができる時であり、天狗にとっての狙いどころであったことがわかる。

[玄鑑伝梗概] (卷四)

ある時天狗が人に憑いて玄鑑の弟子に語った。自分は以前、あなたの師、玄鑑の善根を奪おうと図ったことがある。玄鑑は酒を一滴も飲まないという誓約をしていたので、それを破らせようと、院司の心に入り込み、食べ物に酒を混ぜさせた。しかし玄鑑は本尊を念ずることによって、それを吐き出してしまった。するとたちまち護法童子がやってきて、杖で自分の頭を打ち砕いた。自分はそのことを恨みに思っ、その後玄鑑をつけ狙ったが、ついにその隙がなかった。さらに玄鑑の臨終の時に往生を妨げようとしたが、結局果たせなかった。

[本文(部分)]

汝カ師精進勇猛ノ人ナリシカハ、彼善根ヲ奪シタメニ、恒ニ天井ノ上ニ居住シテ、其ヒマヲ伺フ所ニ、院司ノ僧カ心ニカハリテ酒ヲ汁ニ入シメテ、其誓約ヲ破ラントスル所ニ、和尚本尊ヲ念、忽ニ反吐ニ及

つ時、護法來テ杖ヲ以テ我頭ヲ打損セリキ、

この説話の中でも、天狗は僧の修行を邪魔し、隙をついて墮落させようとする存在としてあらわれている。またこの説話においても、天狗を退治しているのは護法童子である。さらに注目されるのは、杖で頭を打つという天狗を調伏する時の方法である。これについては、後に触れるが、頭を打つという退治方法が天狗というものを考える上で大きな意味を持つ。

またこの玄鑑伝でも、調伏された天狗が恨みをいだいて玄鑑の隙をねらうが、ついにその隙がなく、臨終の時に往生の妨げをなそうとしている。この場面でも結局、聖衆の來迎があり、天狗は玄鑑に近づくことができないが、やはり往生の妨げをなすものとして天狗が記されているといえよう。

[ 慈忍 (尋禪) 伝梗概 ] (卷五)

円融院のころ、唐から五百の天狗が日本にやってきた。唐の天狗は日本の天狗に会い「唐には優れた僧がいるが、われわれにかなうものはいない。日本の僧と力くらべをしようと思う」と言う。日本の天狗は内心とでもうれしく思い「日本の験者はわれわれが痛めつけようと思えば、すぐに痛めつけられるものばかりだ」と欺いて、唐の天狗を比叡山に連れて行った。まず余慶律師が通りかかったが、唐の天狗は南谷の方に尻を逆さにして、隠れてしまう。日本の天狗が問うと、唐の天狗は「輿にのった余慶律師の姿はみえず、輿の上には炎ばかりが見えた。その火に焼かれるのが怖かったので、隠れたのだ」と答える。次に尋禪が通りかかるが、唐の天狗は頭を抱えて逃げてしまう。あとで日本の天狗が問うと、尋禪の前駆をしている童子に捕まえられて頭を割られると思ったので、逃げたと答える。三人目に慈恵が通りかかる。今度は逃げられず童子たちに捕まえられ腰を踏み折られた。

[ 本文 (部分) ]

暫ク在リテ山ノ方ヨリ京へ余慶律師ト云人、手輿ニ乗リ下リ給フ、是ハイミシク止ム事ナク世ニ覺ヘアレハ、イカテレウセント思フ物ナラハ、是ヲハ必スレウシテント思フニ、イミシクウレシ、ヤウハ、石卒塔婆ノ下過ル程ニ、殊更レウセンカシト思テ、此ノ老法師ノ方ヲ見ヤレハ、老法師ハミエスカシ、サテ律師ハイト平カニシテ弟子共アマタ引具シテ下リヌ、(中略) 唐ノ天狗ヲ尋レハ、南ノ谷ノ方ニ尻ヲ逆マニシテ隠レ居タリ、(中略) 唐ノ天狗ノ云様其ノ事ニ侍リ、物ノ体ノヤムコトナク見ツレハ、是ニコソ在ルナレ、レウセン物トウレシウ思テ、立出ントテ見ヤリツルニ、此ノ御房ノ体ハ見ヘスシテ、手輿ノ上ノマウニ燃エタル火ノ炎ニテ見ヘツハ、寄テハ此ノ炎ニ焼ケモコソスレラメ、是ハカリハ見ユルシテント思テ、ヤハラ藪ニ隠レヌル也ト云ヘハ (中略)

飯室ノ權僧正ノ下リ給ナリケリ、御手輿ノ前一町許リ先立テ、髪チハミタル童ノ大キナル杖ヲ捧ケテ、腰カラミタル前ニ立テ萬ノ人ヲ拂ヒ行ク、此ノ老法師イカニスラント見ヤレハ、此ノ法師ヲ先ニ追ヒ立テハ、打チ以テ行ク、法師頭ヲカハヘテ逃ケヌ、(中略) 唐ノ天狗ノ云ク、イトワリナシ、此前ニ立テル童ノニカスヘクモ見ヘヌ氣色ノ見ヘツレハトラヘテ、頭ヲ打チワラレヌサキニト思テ逃ケ隠レツルナリ

慈忍 (尋禪) 伝に載せられている唐の天狗の説話は『今昔物語集』卷第二十、第二話や繪卷『是害房繪』などと共通する非常に有名なものである。まず確認したいのは、天狗が恐れているのがやはり護法童子であるという点である。また余慶に會った時に、天狗は火に焼かれることを恐れているが、このことはさきに述べた『大法師淨藏伝』や『眞言伝』の遍照伝の天狗が護摩壇で焼かれて退治されていることと重なる。さらに注目されるのは唐の天狗が、尋禪の前を歩く「髪ちぢみたる童」を見て、頭を抱えて逃げてゆき、後で日本の天狗に對して「とらえられて頭を打ち碎かれると思って逃げ隠れたのだ」

と述べている点である。天狗はここで杖を持った童子に、頭を割られることを恐れているのである。この記述は、先の玄鑑伝で、天狗が護法童子に頭を碎かれて退治されていることと連なる。また最初に余慶律師に出會って、逃げ出した時にも、日本の天狗が唐の天狗を捜すと、唐の天狗は「南谷の方に尻を逆にして隠れをれり」とある。さらに最後に慈恵に會って唐の天狗が捕まえられ責められている時も、日本の天狗は、頭を深く藪の中に入れて隠れている。このような表現も、天狗が頭を打ち碎かれることを恐れるゆえの動作であると考えられる。

また『眞言伝』の編集の意図を探る意味で、興味深いのはこの説話が慈忍（尋禪）の伝記として載せられている点である。三人目の僧に天狗が倒されてしまうという、この話の構成から考えると、最後の南山の座主、慈恵の話が一番クライマックスとなるべきところである。徐々に僧侶の位が上がっていることから、それはいえるだろう。しかし『眞言伝』ではこの話は、二番目にでてくる慈忍（尋禪）の事績を語る話として紹介されている。この説話の中では、最初の余慶律師が用いていたのが火界の呪、次の慈忍（尋禪）が用いていたのが不動の呪、最後の南山の座主、慈恵が身を守ったのが天台止観であると記されている。そして火界の呪、不動の呪は早く捕まえられるので、あわてて逃げたのだが、天台止観はそれほど早くないのでゆっくり逃げたところ捕まってしまったと天狗は述べている。この話は本来ならば、座主の用いた天台止観が一番強いということになるはずである。ここで『眞言伝』が、不動の呪を用いた慈忍（尋禪）の功績としてこの話を載せていることには、榮海の東密の僧侶としての立場が反映していると考えられる。榮海が強調するのはあくまでも、眞言僧としての陀羅尼の力であって、台密の天台止観は問題にされなかったのだと考えられる。

以上『眞言伝』における天狗説話についてみてきた。冒頭に述べたように、中世の伝承世界では、天狗が政治的敗者の怨霊と同一化してゆくことや、反仏法から展開した反王法の存在として描かれることがすでに指摘されている。しかしこれまでみてきた『眞言伝』における天狗には、そのような性質がみられないことがわかる。また驕慢の僧侶が天狗道に落ちて天狗になるという論理がよく知られているが、そのような天狗もでてこない。むしろ高僧をつけねらう、反仏法の存在としてその性質は単純化されているようにみえる。

次に中世において天狗と同一のものとされていた「魔」の登場する説話について述べたい。天狗を「天魔」、「波旬」として捉える論は、延慶本『平家物語』や『溪嵐拾葉集』にみられ、よく知られている。

[智弁（余慶）伝梗概]（巻五）

天延三年叡山で内論議を始行した時、魔障を拂うための秘法を智弁が修した。ところが論場で騒ぎがおこっておさまらなかった。智弁は魔のくわだてによることを知って、手に五鈷を取って高聲に「たとえ第六天の魔王であっても余慶の験徳にかなうものか」と唱えた。すると騒ぎがおさまり静かになった。

[本文（部分）]

天延三年ニ叡山ノ内論議始行スルニ、魔障ヲ拂ハン爲ニ、秘法ヲ修セントスルニ、満山群議シテ僧正ヲ以テ、阿闍梨トス、衆議ニ依テ秘法ヲ勤修ス、論場ノ日ニ望ムニ、衆口雷ヲ成シテ制ヲ加ルニ弥ヨ喧シ、魔縁ノ企ナル事ヲ知テ、僧正其場ニ出テ、手ニ五鈷ヲ取テ、高聲ニ唱テ云、縦第六天ノ魔王也ト云フトモ争テカ余慶カ験徳ニ競ハンヤナリカタシヽヽヽト云事、二聲衆雷聲ヲ留テ論場無爲ナリ、一山ノ學徒称美セスト云事ナシ

この智弁（余慶）伝の話は、叡山の内論議を行うにあたって、智弁（余慶）が魔障を拂う秘法の阿闍梨を勤め、魔のたくらみであった人々の騒ぎを見事に収めるという話である。大切な論議を邪魔す

る存在として魔は現れている。この話も論議の場を護るために秘法を修するという実践的な行法が關わる話である。

[成典伝梗概] (卷六)

成典が仁和寺の円堂で行法をしていると、悪魔が襲ってきて、妨げをなした。成典が『理趣経』の「一切諸魔不能の文」を誦して、魔を投げ飛ばしたところ、魔は退散した。

[本文(部分)]

仁和寺ノ円堂ニシテ、行法ノ間悪魔ヲソイ來テ、妨ヲ成シテ僧正ニ取付奉ル、僧正理趣経ノ一切諸魔不能壞ノ文ヲ誦シテ、彼ノ魔ヲ取テ投ケ給ヒケレハ降伏セラレテ退散シニケリ、

成典伝の天狗説話は冒頭で紹介した『今昔物語集』(第二十、第五話)と、仁和寺の円堂に魔(天狗)が現れたとする点において共通する。しかし『眞言伝』成典伝では、成典は『理趣経』の「一切諸魔不能の文」でこの魔を降伏したと明記しているが、このような記述は『今昔物語集』にはない。『眞言伝』の方には天狗を撃退する方法が、より具体的にあらわされているといえよう。この話においても、天狗は実践的な行法の場に妨げをなす存在として登場していることを確認できる。

次に慶円の話である。『眞言伝』にでてくる天狗、魔の話としては唯一、かつては人間であった魔がでてくる。

[慶円伝梗概] (卷七)

和州の堯信房が魔に憑かれていた。験者に加持をさせたが効果がなかった。この病者に受戒をしようということになり、慶円が呼ばれたが、慶円が行くと、病者についた魔が「自分は生きていときに、僧侶であり灌頂を受けられることになったがそれがかなわなかったので、そのことが執心となって魔道に落ちた」と話した。魔が灌頂を請うので、慶円は灌頂を授けてやる。また慶円が往生の時の魔難をいかに避けたらいいのかと、魔に尋ねたところ、魔が「自分の門徒は三百余いるがそのそれぞれに申しつけておいて、魔難を退けさせましょう」と述べた。

[本文(部分)]

上人請ニ趣ク、病者恭敬ノ儀ヲ至シテ拜謁ヲ悦フ、我在生ノ時彼ノ灌頂究竟ノ由ヲ聞テ、伝受スヘキ由存スト云ヘトモ叶ハスシテ止ミヌ、其ノ執心ニ依テ魔道ニ墮ス、先生仏法ノ薰修ニ依テ強チニ苦痛ナシ、願クハ慈悲ヲ垂レテ授ケ給ヘト云(中略)、上人云臨終ノ時魔難ヲ退クル事イカ、侍ルヘキ、彼云我門徒三百余アリ、一々ニ申シ触レテ其ノ難ヲ退クヘシト云テ暇ヲ乞ヒテ去ヌ、

やはりここでも臨終の時の魔の妨げに對する關心がみられ、魔が往生を妨げる存在として描かれている。また灌頂に對する執心が魔道に墜ちた原因とされており、灌頂という密教の儀礼に關わってこのような魔の存在が示される点が興味深い。

また注目したいのは、この説話と似た内容の説話を『四卷鈔』という聖教にみることができる<sup>5)</sup>。

『四卷鈔』

慶円が大和國の病者のもとにゆくと、病者にとりついた靈が「自分は醍醐に住むものであるが、若凡若

5) 『四卷鈔』(眞言宗全書三) (1935) 眞言宗全書刊行會

聖の文の結句を知りたいと思ったが知ることができなかったのでそのことが、執着となって魔道に落ちた」と述べる。慶円がその文を紙に書くとその病者はそれを呑み込んだ。

『四卷鈔』は榮海の弟子にあたる俊然が、榮海から伝えられた印信や口伝を書き集めた聖教である。慈尊院流の正嫡だけに伝わる口伝が多く記されている。この部分もこの記事のあとに榮海の奥書がみられ、榮海の口伝を載せたことがわかる。

この二つの話の天狗は、かつては人間であり、執着によって魔道に落ちたものとして登場するが、この場合も政治的敗者や愛欲に溺れたものとしてではなく、あくまでも仏法に執着するものとして書かれている。

また天狗が中世の僧侶にとって、どのように位置づけられていたのか、聖教や経典とどのように関わっているのかという問題を考える上で、このように慈尊院流の正嫡の聖教として重視される『四卷鈔』に載せられた説話が、『眞言伝』の説話と共通している点は注目される。聖教と伝記集が連動している例とってよいだろう。

これまで『眞言伝』における天狗像について確認してきた。その結果、天狗は僧侶を欺き、墮落させようと狙う存在であるということ、中でも臨終の時を狙うものであること、天狗が恐れるのは僧侶に付き従っている護法童子であること、特に護法童子に頭を碎かれることを恐れていることが判明した。また『眞言伝』における天狗説話には、寺院における具体的な行法の場と結びついている説話がみられ、不動眞言、大威徳眞言、『理趣経』の「一切諸魔不能の文」など、天狗の退治に効力を持つ具体的な方法に触れているものがあることが明らかになった。『眞言伝』の関心は実践的な天狗への対応策を説き、眞言の力を強調することにあるといえるだろう。そこには愛欲に執したのものや、驕慢の心を持ってしまったものとしての天狗はあられなく、政治的な敗者の天狗もあられもない。また天狗の滑稽さを楽しむような姿勢は一切みられないことが判明した。

## 2. 聖教に登場する天狗

前節では『眞言伝』の天狗像を確認したが、その天狗像は編者榮海が學侶として関わった経典や聖教とどのように繋がっているのだろうか。本稿ではそれを確かめていくために、天狗の退治の方法として、護法童子が天狗の頭を打ち碎くという表現があることに焦点を絞って検討してゆきたい。ちなみに天狗の退治の方法については、他に護摩壇で焼くという方法が冒頭に述べた『大法師淨藏伝』や、さきに触れた『眞言伝』遍照伝にみられる。護摩という密教の行法で焼かれる存在としてあらわれているところに、天狗の密教との関わりが示されているといえるであろう。

榮海の記した聖教『泉宝入壇記』には、榮海の夢に天狗が現れたことが記されている<sup>6)</sup>。

『泉宝入壇記』

又二月一日夜夢云、到或亡屋中其屋中、有天狗、其形如法師、長丈餘、髮長蓬頭也、自左右脇羽翼、出現存魔界之由、以所持五股、打彼頭、即以轉倒杵突摧頭、々破作七分也。至誠誦慈救咒、降伏之由、見之三箇條已、以瑞夢也、灌頂之時、可祈好相之由、本經所說分明也、今已感瑞夢、定有冥助歟之旨、談

6) 『大日本史料』第六編第二十四冊東京大學史料編纂所東京大學出版會pp.164~184



話之、精進中无殊障碍、誠是篤信之所致而已

内容に入る前に『杲宝入壇記』という資料について少し述べたい。この『杲宝入壇記』は榮海が杲宝に灌頂を受けた時の記録を、榮海が記し杲宝に授けたものである。杲宝の弟子賢宝の識語からは、応安四年（1397）に賢宝が書寫して東寺における勸修寺流の秘書としたということがわかる。杲宝は觀智院の第一世、東寺の三宝の一人といわれた高名な僧侶である。東寺觀智院を築き、南北朝時代以降の東寺の展開に重要な役割を担った人物であるといえる。『杲宝入壇記』には、「事相教相のことを多年にわたって稽古しており、諸人が彼の教義を學ぶ隨分名譽の人である」とある。榮海のもとを訪れる前にすでに學業を積み、名聲のある人物であったことがわかる。そのような杲宝が慈尊院流の法を受けるために榮海を訪れ、貞和元年（1350）の夏頃から勸修寺に止住して法を學んでいた。この灌頂はその仕上げの儀礼であったと考えられる。榮海はこの時、六十九歳、翌年貞和三年(1352)の夏には亡くなる。この聖教はこのような著名な僧の正式な灌頂の記録として重視される書であった。

『杲宝入壇記』には三つの夢想が記されているが、この天狗の夢想はその中の一つとして記されている。榮海の夢に現れた天狗は、「其の形、法師のごとくして、長さ丈餘、髮長く、蓬頭也。左右の脇より羽翼出現す」とあり、説話や軍記などの伝承にみられる天狗の姿をしている。榮海は魔界之由を存じて、つまりこれは魔界のものであると認識して、所持の五銚を以って、天狗の頭を打つ。天狗は轉倒して頭を突き碎かれた。そして「頭破作七分也」つまり天狗の頭は七つに割れたとある。この天狗の頭が七つに割れるという記述は、なぜ七つなのか、奇妙に詳細な夢想であることが不思議に思われるところであるが、後に詳しく触れることにする。この夢想を榮海は瑞夢であるとして、灌頂の良相であり、冥助があるだろうとしている。ここにこの灌頂記の中に夢想が書かれた意義があらわれされていると思われる。

榮海は別の聖教『儼避羅鈔』においても、自らの夢に現れた天狗について記している<sup>7)</sup>。

『儼避羅鈔』卷十四（裏書）

嘉曆元年十一月廿三日夜夢相、於或所天狗集會不知其數、望虛空黑雲繚亂、暴風騷動、宛如燒亡歟、黑雲隙雷光如吐炎、彼天狗中有主人、覺鑿上人也、濃墨染衣著袈裟、袈裟下羽翼指出、面貌太以可怖畏、予對上人問一宗秘密云。（以下略）

この裏書は表の伝法灌頂のことに關連しており、榮海は夢の中で覺鑿上人と一宗の秘密について問答したとある。しかしその時の覺鑿上人は、天狗の主としてあらわれている。榮海は黒雲がたなびき、雷が光る中で天狗の集會をみた。その集會の主人としてあらわれているのが覺鑿上人であった。彼は濃い墨染めの袈裟を着ていた。袈裟の下からは翼が生えており、容貌ははなはだ恐ろしかった。この夢想で登場する天狗も、袈裟を着て翼が生えており、軍記物語や説話集、繪卷『天狗草紙』などでてくる天狗と同じ姿をしていることが確認できる。

ところで『杲宝入壇記』に記された頭を打ち碎かれて退治される天狗とは、具体的にどのようなイメージであったのであろうか。頭を七つに碎かれるとはどのようなことで、また碎かれるのはいかなる存在であろうか。この夢想に書かれている「頭破作七分也」という表現からそれを追求してみたい。

まず「頭を七つに碎く」という表現と天狗との接点が『杲宝入壇記』にのみにみられる譯ではないこと

7) 『儼微羅抄』(大日本仏教全書五二 仏書刊行會 pp.300~301)

を確認しておきたい。前節で紹介したように『眞言伝』の慈忍（尋禪）伝には、唐の天狗が日本の高僧を陥れようとして逆に懲らしめられてしまうという説話があり、この説話は『今昔物語集』巻第二十、第二話や『是害房繪』にも載せられている。その一つ『是害房繪』はこの説話に繪を付して繪卷化したものであるが、その中には以下のような文言がある<sup>8)</sup>。

十羅刹女行者ヲ擁護シタマフ。依之持經者ヲ惱セハ頭七分ニ破門宗ノ教ヲ謗スレハ舌口中ニ爛人云ヘリ。加之經文ニハ天諸童子以爲給侍ト説キ解釋ニハ唱首楞嚴之名魔尙被縛ト尺セリ。サレハカ、ル目ヲ見給コソコトハリニ覺侍ヘシ。

まずこの文言がみられる場面について説明する。この文言は、護法童子に懲らしめられた唐の天狗、是害房に、日本の天狗、日羅房が「日本を小國と置いて侮っていたからこのような目にあわされるのだ。日本は小國とはいっても聖徳太子が仏法を伝來させ、弘法大師が仏法を興隆させ、伝教大師が比叡山に鎮護國家の道場を作った地である」と主張する場面であらわれている。ここで日羅房は「そのように日本は仏法興隆の地であるから、夜叉は仏法を護り、十羅刹女は行者を護っている。行者を悩ます者がいれば、その者の頭は七つに割られ、教を誹謗すれば口が爛れてしまうだろう」と述べる。またさらに「經文には護法童子が行者に付き従うことが記されている」と述べ、行者が強く護られていることを強調している。注目されるのは、「頭を七つ砕く」という表現が、行の妨げを爲そうとする者を撃破するという意味で使われており、それが天狗によって語られて恐れられている点である。

このようなことから考えると、榮海の夢想の中で天狗の頭が七つに割られたのは決して偶然ではなく、当時の僧坊の社會において、天狗は頭を七つに割られて撃退される存在として認知されていたという背景があったと思われる。そして第二節において確認したように、『眞言伝』などにおける説話の中で、天狗が頭を隠して逃げ、頭を砕かれて退治されるのも、このような共通認識が影響したと考えられる。それではこのような認識が僧坊において流通したのはなぜだろうか、「頭破作七分」という文言を手がかりに考察したい。

「頭破作七分」という語句の展開については、宮井里佳氏が研究しておられる<sup>9)</sup>。宮井氏は「中國において好んで使用された「頭破」とは護法者（經の受持者）に災いをなそうとする者に對して、仏（や仏に遵う者）によって禁止の命令（呪）が説かれ、その命令に従わなければ「頭が七つに破裂するぞ」と説かれる脅しの呪句である」とされている。また氏は、この語句はさらに古くさかのぼることができ、「ウパニシャドの根本眞理を探究する議論において、分をわきまえず論争を仕掛けたり、問に答えられなかったりするときに「頭が飛び散る」という警告・脅しの文句がしるされている。原始仏教經典においても、世尊と他學派との論争の勝負において「頭が七つに破裂する」という脅しの文句が見られる」とされている。

用例は省くが、經典において多くの用例を見出せる語句である。その中でもこの語を廣く流布させたのが『法華經』陀羅尼品にある文句「若不順我呪 惱亂說法者 頭破作七分 如阿梨樹枝」である。『法華經』のこの語句は、羅刹女が、何者も法師を悩ますことがないようにという陀羅尼呪を説いている場面に登場する。その場面で羅刹女は「この呪を聞きながら法師に危害を与えるものがあるならば、その者の頭はアルジャカの花のように七つに破裂するだろう」と語っている。この表現はまさに先に挙げた『是害房繪』の文言のもとになったと考えられる。このような行者を害する者のイメージが、いつ

8) 『是害房繪』（新修日本繪卷物全集27『天狗草紙・是害房繪』）(1978)角川書店 p.99

9) 宮井里佳(1996)「中國における「頭破作七分」の受容と展開」『仏教史學研究』四十卷一号 pp.1~17

しか天狗という具体的な姿を持ったと考えることができそうである。

また『杲宝入壇記』では天狗の頭を金剛杵でつき砕いたところ、七つに割れたと表現されていたが、さらに『杲宝入壇記』の記述に近い、金剛杵で頭を七つに砕くという表現も経典・儀軌の中にみることができる。

『仏説灌頂経』卷四『百結神王護身呪経』<sup>10)</sup>

爲説無上灌頂章句大神王名字、守護万姓故、使得安隱離諸危厄度於邪惡、使諸魔鬼不得作害、結願神名常在左右、爲人防惡使毒不行、所請如是惟願演之、仏告天帝釋善哉善哉諦聽諦受、吾今爲汝而演説之、令諸世間一切衆生、有受三自歸者、盡帶持此百大神王名、以護人身辟除邪惡、使万毒不行百姓安寧、若千億神恒沙數鬼皆不得留任、帶神名者身中有鬼神在其身中不去者、四天王当遣使者、持金剛杵碎頭作七分

『仏説灌頂経』では、この陀羅尼を呪する者を害しようとする鬼神がいるならば四天王があらわれて、金剛杵でその頭を七つに砕くであろうと書かれている。『仏説灌頂経』は中國密教の経典であり、仏法に障碍をなす鬼神を拂うための陀羅尼を説いたものである。『大藏経全解説大辭典』によると、「経題の初めに灌頂とつく十二種類の教典を集めたもの。この灌頂は、鬼神等の名前を灌頂章句とっているもので、初期の雜密教典の譯経にもみられるように、章句（灌頂章句または陀羅尼章句）とは陀羅尼呪句のことであり、これらの鬼神の名前を唱えてさまざまな障碍を除く呪文とすることを説く経である」とある。また「日本において仏説灌頂経は奈良時代以降に東大寺寫経所などにおいて多く書寫され、また仏説灌頂経法の修法も度々催されており、信仰されたものと考えられる」とあり、早い時期から日本にも入ってきたことがわかる<sup>11)</sup>。またこのように邪鬼、鬼神の頭を七つに割るという表現は、密教修法の儀軌に多くの用例を見出せる。

『阿咤薄俱元帥大將上仏陀羅尼経修行儀軌』では、大元帥明王を描く際の潔齋の重要性が説かれ、もしも五辛の食べ物を食したならば、その頭を七つに碎かれてしまうだろうという文脈で記されている。

『阿咤薄俱元帥大將上仏陀羅尼経修行儀軌』<sup>12)</sup>

畫人持戒勿食五辛。若欲食者我以跋折羅刺其心上。令畫人口中流血。八大金剛析碎頭破七分。

ちなみにこの『阿咤薄俱元帥大將上仏陀羅尼経修行儀軌』の伝える大元帥法は、『靈巖寺和尚請法門道具等目録』にもみられ、やはり早い段階で日本に伝えられたことがわかる<sup>13)</sup>。『靈巖寺和尚請法門道具等目録』は、靈巖寺の開基円行が入唐した際に請來したものの目録であり、承和六年（839）に書かれている。円行は弘法大師に法を受け、円仁とともに入唐し青龍寺に學んだ僧である。そしてこの『靈巖寺和尚請法門道具等目録』にも「大元帥化身像一軀。右大元帥者。如來之教令輪也。仏爲含情作救作護。示大元帥形。郡邪見形頭破七分。衆惡聽名魔道塵散」とあり、「頭破七分」の語句がみられる。

もちろん『杲宝入壇記』に至るまでに、いくつもの段階があったと考えられ、『仏説灌頂経』や『阿咤

10) 『仏説灌頂経』（『大正新脩大藏経』一三三一、卷二一） pp.504～505

11) 苦米地誠一(1998)『仏説灌頂経』『大藏経全解説大辭典』雄山閣出版 pp.363～364

12) 『阿咤薄俱元帥大將上仏陀羅尼経修行儀軌』（『大正新脩大藏経』一二三九、卷二一） p.195、196、198

13) 『靈巖寺和尚請法門道具等目録』（『大正新脩大藏経』二一六四、卷五五） pp.1071～1073

薄俱元帥大將上仏陀羅尼經修行儀軌』のような密教経典・儀軌から直接的に頭を七つに割られる天狗のイメージが入ってきたものとはいえないであろう。しかし『杲宝入壇記』における表現の背景に、『仏説灌頂経』や『阿陀薄俱元帥大將上仏陀羅尼經修行儀軌』のような密教経典・儀軌における拂われるべき鬼神のイメージが生きていたと考えることはできる。

これまで七つに頭を碎かれる存在という点から眞言僧榮海の天狗のイメージについて考えてきた。陀羅尼が日本にもたらされた時に、当然陀羅尼の効果として撃退されるところの鬼神のイメージも一緒にもたらされたと考えられる。『杲宝入壇記』における天狗には、陀羅尼や密教における修法によって撃退される鬼神のイメージと、袈裟をまとい、翼を持つ日本の天狗のスタイルとの合流をみることができると思われる。

### 3. 頭を碎かれる天狗

第二節では、『杲宝入壇記』の天狗の夢想の記事を中心に、特に天狗の頭を七つに碎くという表現について考察してきた。そしてそれは第一節で確認してきた『眞言伝』の玄鑑伝や慈忍伝の天狗が、護法童子に頭を打ち碎かれることを恐れているということと重なる。しかし慈忍伝の唐の天狗の説話は、『眞言伝』だけではなく、『今昔物語集』にも共通する説話である。頭を打ち碎かれて退治される天狗の登場は『眞言伝』に限られるということではない。以下に『今昔物語集』から頭を打たれて撃退される天狗の一例を挙げる。

(『今昔物語集』卷第二十、第六話梗概)

東山に住む仁照阿闍梨のもとに、ある時から女がやってきて食料や衣服をさし入れするようになった。ある日、寺の人がみな出かけていて阿闍梨一人の時に女がやってきて、阿闍梨に襲いかかる。阿闍梨が「不動尊、我を助け給え」と言って額ずくと、女はいきなり二間ほど向こうに投げだされる。さらに阿闍梨が仏前に祈ると、女は四、五度叫んで、頭を柱に当て、破れんばかりに四、五十度頭を打ちつけられる。阿闍梨が女の頭を持ち上げると女は、「自分は天狗であり、阿闍梨をおとしめようと謀って、女に憑いてきたのだ」と白状する。

この話では、不動の護法童子は見える形で動いてはいないが、やはり天狗は頭を打ちつけられることによって、僧を墮落させようとしたというたくらみを自白しているのである。天狗が打たれたように投げ出され、転倒して頭を打ちつけられている点は、『杲宝入壇記』における天狗退治の場面とも重なる。頭を打たれて退治される天狗は、聖教、伝記集、説話集という、テキストのジャンルを越えてあらわれている。そして前節において確認したごとく、その当時の僧侶が天狗退治の場面を、経典・儀軌における鬼神退治の場面と重ねてイメージしていたとすると、それは経典・儀軌の世界とも繋がっていたということができる。

またそのように考えてゆくと、『眞言伝』の智弁伝において智弁が魔を鎮めるために、高聲で宣言する場面において、手に五鈷杵を持っているということも、邪鬼の頭を五鈷杵で碎くという『杲宝入壇記』や経典・儀軌と繋がっていると考えられる。

『眞言伝』における天狗が、政治的敗者や愛執にとらわれた怨霊と同化されず、実践的な魔難を避けるという関心で貫かれているのも、このような陀羅尼とともに説かれる鬼神のイメージと通じあうよ

うに思われる。

## おわりに

本稿では、『眞言伝』における天狗説話を手がかりに、榮海の天狗像を追求してきた。その中で護法童子を恐れ、頭を碎かれて退治される天狗が描かれていることを見出すことができた。また『杲宝入壇記』の記述の中に天狗の退治の仕方として頭を七つに碎くという表現があることから、そのように退治される天狗とはいかなる存在であったのかを追求した。そこで経典・儀軌の中で、陀羅尼や修法によって撃退される鬼神に對して同様の表現が用いられることが判明した。そこから天狗が、陀羅尼や修法で撃退される鬼神とイメージを重ねられていたことが推測できた。このことは、説話において天狗が寺院周辺にあらわれ、高僧をつけねらうという性質を持つことの原点となったと思われる。さらにいうならば、修行を行う僧の実践的な立場から、天狗は僧の修行、とくに精進潔齋を妨げるものとして認識されていたのだと思われる。『阿陀薄俱元帥大將上仏陀羅尼經修行儀軌』において、四天王がやってきて頭を七つに碎くのは、繪師が五辛の食べ物を食べないという規則を破った場合である。『杲宝入壇記』の天狗の夢想においては、榮海は夢の中で天狗を打ち碎いたことによって、弟子杲宝の加行の成功を確信している。さらに『眞言伝』玄鑑伝の天狗は、玄鑑の酒を飲まないという誓願を破らせようとしているし、『今昔物語集』の仁照の天狗説話では、天狗は道心堅固な仁照に女性を差し向けている。このような鬼神、天狗は、修行の場において一瞬の隙について煩惱をくすぐり、僧侶を墮落させる存在としてあらわれている。

最後に『沙石集』において、「先徳の釋に魔鬼と云へるそ是にやと覺へ侍る」と天狗を魔鬼に比定していることについて少し触れたい。注意されるのは魔鬼という言葉が第二節で触れた『仏説灌頂經』の前掲箇所にもでてくる点である。このような密教経典に魔鬼という言葉がでてくることを考えあわせると、無住のこの言葉にも陀羅尼に撃退される鬼神の反映をとらえることができるだろう。

もちろん天狗の様相はさまざまに派生するので、すべてがこのような天狗像に集約されるわけではない。しかし『杲宝入壇記』にあらわれた天狗は、仏法の敵としてあらわれる天狗像の原点を示唆するものであり、説話における天狗と、聖教、経典の世界を結ぶ一点であると考えられる。

天狗は密教を中心とする寺院においては、僧侶の修行の実践の場で意識され、警戒される存在であった。その性質は天狗がさまざまな文學作品の中に活動するようになってからも、数々の逸話を生む原動力でありつづけたのだと考えられる。

\*『眞言傳』の本文は、東寺觀智院本と寛文版本を適宜校合して用いた。

\*引用本文中の文字は、現行の字體にあらためた。

## 【参考文献】

- ・『對校眞言伝』(1988) 説話研究會 勉誠社
- ・小峯和明(1991)『説話の森』大修館書店 pp.36~ 40
- ・今野達(1958)「善家秘記と眞言伝所引散逸物語—今昔物語集との關連において—」『國語と國文學』 pp.14~

- ・『四卷鈔』(眞言宗全書三一)(1935)眞言宗全書刊行會
- ・『儼微羅抄』(大日本仏教全書五二)(1914)仏書刊行會 pp.300~301
- ・『是害房繪』(新修日本繪卷物全集27『天狗草紙・是害房繪』)(1978)角川書店 p.99
- ・宮井里佳(1996)「中國における「頭破作七分」の受容と展開」『仏教史學研究』四十卷一号 pp.1~17
- ・『仏說灌頂經』(『大正新脩大藏經』一三三一、卷二一) pp.504~505
- ・『阿訶薄俱元帥大將上仏陀羅尼經修行儀軌』(『大正新脩大藏經』一二三九、卷二一) p.195、196、198
- ・苦米地誠一(1998)『仏說灌頂經』(『大藏經全解説大辭典』雄山閣出版 pp.363~364
- ・『靈巖寺和尚請法門道具等目錄』(『大正新脩大藏經』二一六四、卷五五) pp.1071~1073

## 要 旨

天狗は中世説話のさまざまな場面に登場する怪異のひとつである。『今昔物語集』などの説話における天狗は寺院周辺に登場し高僧を誑かすという性質を持つ。しかし天狗と寺院、經典、聖教との関係には不明な点が多い。『沙石集』や『聖財集』においては、經典や聖教にはでてこない、日本固有のものであり正式な仏教とは結びつかないものであるとされている。中世の僧侶からみた天狗とはどのような存在であったのであろうか。眞言僧榮海が編纂した伝記集『眞言伝』を中心に考えてゆく。『眞言伝』を検討してゆくと、天狗は僧侶を欺き、墮落させようと狙う存在であるということ、特に臨終の時を狙うものであること、天狗が恐れるのは僧侶に付き従っている護法童子であること、特に護法童子に頭を碎かれることを恐れていることが判明した。

また榮海の書いた宗教テキスト『杲宝入壇記』には、榮海の夢にでてきた天狗のことが書かれている。その中には天狗の頭を七つに碎くという表現があり、その表現について調べてゆくと經典、儀軌の中で、陀羅尼や修法によって撃退される鬼神に対して同様の表現が用いられることがわかった。そこから天狗が、陀羅尼や修法で撃退される鬼神とイメージを重ねられていたことが推測できる。それは『眞言伝』の天狗が、護法童子に頭を打ち碎かれることを恐れているということと重なる。天狗は密教を中心とする寺院においては、煩惱をくすぐり僧侶の修行を邪魔するものとして実践の場で意識され、警戒される存在であったと考えられる。

キーワード：説話・天狗・榮海・『眞言伝』・『今昔物語集』・眞言宗・高僧伝・  
聖教・密教・調伏

투 고 : 2004. 2. 28  
2차 심사 : 2004. 3. 13  
3차 심사 : 2004. 4. 3

住 所：日本國滋賀縣草津市若竹町4-3-205

電 話：077-567-3525

E-mail：zaurusu@aqua.livedoor.com

K C I